

Title	<書評> 島菌進著『日本仏教の社会倫理 — 「正法」 理念から考える—』
Author(s)	矢野, 秀武
Citation	宗教と社会貢献. 4(1) P.61-P.65
Issue Date	2014-04
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/27461
DOI	10.18910/27461
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

島菌進著

『日本仏教の社会倫理 — 「正法」 理念から考える—』

岩波書店、2013年9月18日、四六判、281頁、2300円+税

矢野秀武*

1. 本書の魅力

本書は、日本仏教の社会倫理（人々の共同の場や公領域における倫理）について、「正法」^{しょうぼう}理念に着目しつつ考察したものである。超俗性ではなく社会倫理となると、仏教においては二義的なテーマと思われることもあるかもしれないが、本書の試みは、正法理念の思想的深みを掘り下げることにより、この世を超えた領域の事柄とこの世の社会倫理をつなぐための、多面的かつ奥行きのある議論へと結実している。

また本書は、古代日本の仏教から東日本大震災後における仏教の諸活動に至るまでを包括的に捉えているが、それは単に日本仏教史のなかの社会倫理の事例をなぞるといったものではない。正法理念に着目することによって、近代主義的な宗教観を伴う日本仏教の宗派主義的な歴史観を乗り越え、伝統宗教と新宗教の過度な区分を再検討し、日本仏教における社会倫理の意義を捉えなおすなど、他にも多くの刺激に富んだ議論が展開されている。また、古代インド仏教や上座仏教の研究蓄積の応用なども試みられており、日本仏教の実践や研究に携わる方々だけではなく、他分野・他領域を足場とする方々にとっても魅力のある書籍であろう。

そして何より本書が重視している点は、序章において著者が述べているように、日本仏教における学知と実践の在り方を、現実の問題に即し未来に向かう思想として練り上げていくこと、そして世界に届く言葉を紡いでいくことにある。本書の刺激に富んだ議論は、内閉化を伴うような学知の深化が生み出したものではなく、思想化の必要性への強い思いから湧き出てきたものであろう。そのような思想化という視点は、宗教の「社会貢献」なるものに関わる学知の在り方に対しても、大きな示唆を与えてくれる。

以下、目次と各章の概要を紹介したい。

* 駒澤大学総合教育研究部・准教授・yanohide@komazawa-u.ac.jp

2. 目次と各章の概要

序章 日本仏教を捉え返す

第Ⅰ章 出家と在家——近代的な仏教理解を超えて

第Ⅱ章 仏教と国家——正法を具現する社会

第Ⅲ章 正法と慈悲——仏教倫理の基礎概念

第Ⅳ章 正法と末法——日本仏教の形成

第Ⅴ章 正法復興運動の系譜——中世から近世へ

第Ⅵ章 在家主義仏教と社会性の自覚——近代から現代へ

終章 東日本大震災と仏教の力

まず、序章「日本仏教を捉え返す」においては、本書の問題関心、論じる対象、およびその手法が述べられている。問題関心は先述のように、日本仏教の学知や実践を、現代思想としていわば公領域に開いていくことにある。そのためには、仏教の社会倫理が重視され、それがどのようなものであり、どういった可能性を内包しているのかを明らかにしなくてはならない。著者は仏教の社会倫理についての思想史的かつ比較思想的な手法で、その作業を進めることを提示している。

次いで、第Ⅰ章「出家と在家」では、現代日本の仏教の在り方の特質として在家主義および僧侶も在家的な生活様式に近いことに触れ、これらが戒律や出家の意義に対する深い理解や、学知と実践を踏まえた思想の創出の妨げになっているのではないかと指摘する。そこで著者は、出家と戒律に注目し、その意味を無常（死）と暴力といった苦からの脱却と捉え、加えて石井米雄のタイ上座仏教論などを応用・批判しつつ、正法の理念に着目し、出家・サンガの社会的意義を論じている。そのような正法に基づき、暴力に拠らない統治、良き社会の形成という理念は、古代インドの仏教や日本仏教にもみられるものであり、「仏教ははじめから「社会参加仏教」なのではないかと、問いかけている。

第Ⅱ章「仏教と国家」では、日本仏教における正法理念と社会倫理思想を捉えるための土台作りとして、中村元『宗教と社会倫理』の議論を取り上げている。そこでは、初期仏教の時代からすでに、仏教は模範的国王の観念など社会変革志向を持っていたこと、アショーカ王の時代にはそれが

普遍的な法（ダルマ）に基づく帝国形成として結実したこと、その後の大乘仏教の時代には、神聖化された転輪聖王の観念などを生み出し、またそこでも王や国家に関わる正法理念を有していたことなどが指摘されている。

続く第三章「正法と慈悲」では、中村元の慈悲論の問題点を考察する。中村は現代社会で重視されるべきヒューマニズム的な要素を持った仏教社会倫理として、慈悲に注目するが、これに対し著者は、原始仏教のみならず般若経や法華経においても、それほど慈悲の実践は強調されていない点、また親鸞や道元の思想においても、信徒の実践的な倫理としての慈悲は重視されていない点を指摘する。また、中村が慈悲に注目にした背景として、和辻哲郎の日本倫理思想研究の影響を示唆する。

第四章「正法と末法」では、正法を単に真理や仏教的な正しい教えといった意味だけでなく、国王の義務、サンガの実践によって具体化される理念、平和なより良き社会をもたらすものとして捉えなおす。そして『金光明経』を事例に、古代日本の仏教に影響を与えた、正法を实践する王、四天王の守護、国家や自然の秩序化といった考えを指摘する。また鎌倉仏教の展開を、正法復興やあるべきサンガ形成を求める臨済宗・曹洞宗・日蓮宗の路線と、逆に正法復興を断念し末法思想へ独自の対応を見せた浄土宗の路線への分裂と捉えなおす。

第五章「正法復興運動の系譜」では、鎌倉時代と江戸時代の正法復興運動をさらに取り上げている。具体的には、戒律と社会活動を重視した新義律宗の叡尊や忍性の運動、法華経重視の独特な正法（妙法）理念を携えて王仏冥合の理想社会を目指した日蓮の運動などを、正法復興運動が民衆と関わる実践として結実したものとして論じている。また、一向一揆と正法の関係、江戸時代の黄檗宗の戒律実践と社会活動、正法律と十善戒を強調し在家者の修道生活運動を展開した慈雲なども取り上げている。

第六章「在家主義仏教と社会性の自覚」では、近代の日本仏教と正法との関係を論じている。日本における近代国家の形成当初、宗派を超えた正法復興運動が一部に見られたが、十分な力を持たずに、国家神道の社会秩序理念の中に吸収されていった。一方、戦前に独自の展開を遂げたのが、長松日扇の本門仏立講や田中智学の国柱会などの、在家主義かつ宗派主義的な法華・日蓮系の正法（妙法）復興運動であった。また、この流れの戦後の事例として、霊友会、立正佼成会、創価学会などが位置付けられている。

最後に、終章「東日本大震災と仏教の力」では、東日本大震災後の日本仏教の社会的活動を、正法理念の具現化として捉えようとしている。具体的には、慰霊や追悼、傾聴活動などの震災の被災者支援活動、さらには全日本仏教会による宣言文「原子力発電にたよらない生き方を求めて」など、宗派を超えた公領域での仏教活動の展開を紹介し、仏教の社会倫理とその実践が、新たな環境の下で本来の姿を現すことのできる可能性が垣間見えてきたことを示唆する。

3. 本書に関する問い

以上のように本書は、多面的な議論を展開しているのだが、各議論の密度はやや物足りなく感じる点もある。その主たる理由は、著者が「あとがき」に記しているように、本書は学術書ではあるが専門的な研究書ではなく、「日本仏教の社会倫理」についての「大きな見取り図」を提示したものであるからと言えよう。

そういった制約を承知の上で、敢えて問うてみたい事を 3 点ほど最後に述べておく。

まず第 1 に、本書では正法復興の実践者として、僧侶および在家の宗教者の思想や活動が主として取り上げられている。他方で、日本において天皇や為政者たちについては、あまり触れられていない。天皇や為政者は正法に対してどのような思いを持ち、いかなる実践を行っていたのだろうか。この点は、神道的な社会秩序形成の理念との関係にまで考察が広がる可能性もあるので、著者は本書での対象を限定したのかもしれない。とは言え、正法は仏教的な真理を意味するだけではなく、王や為政者ないしは国家を良き方向へと導く理念であり、王や為政者による平和の構築や社会事業などとして現れてくるものでもある（正法と同義に使用される法（ダルマ）は、南アジア・東南アジアでは、超俗の真理や世俗の秩序や規範などの両義的な意味を持つ）。その世俗面での模範を提示したのが、法（正法）による統治を行ったアショーカ王だったはずである。ならば、正法理念の具現化を僧侶や宗教者の思想や活動だけに限定する必要もないように思える。

また、正法が王を媒介に自然世界や神々と連動し、かつ模範としての王を人々が模倣することで社会形成が行われるというコスモロジカルな社会

秩序イメージについても、紙幅に余裕があれば、正法と王・為政者による寄進や儀礼的実践などの事例などから論じる可能性もあるかと思えた。

第2に、著者は正法理念の中心を社会参加や社会倫理に据えた議論を展開しているが、その点は、古代日本の仏教から近代の在家主義的な仏教運動への連続性を捉える上では比較的理解しやすい。しかし逆に、戒律や真のサンガ形勢を目指してはいるが、民衆化や社会参加の展開が不十分な正法復興（形成当初の臨済宗や曹洞宗など）の意味合いが、わかりにくくなる。戒律・サンガ・王といったオーソドックスな正法理念の要素は、法華・日蓮系の在家主義的な正法理念にどのような形で接続していったのだろうか。これは先の第1の問いにも関わることであろう。この点について、もう少し詳細な説明が欲しいと感じた。

最後の問いは、著者への問いというよりは自戒を伴った自問である。著者が重視する思想としての力を持つ仏教研究、過去や現在を整理する理論に留まらず、今ここの在りようを引き受け、未来と世界へ広がる現代思想を生み出すような学的営みと実践の連携というものは、仏教に限らず、現代日本の宗教研究全般、また宗教の「社会貢献」なるものの研究にとっても極めて重要な意義を持つだろう。ただその理想を具現化するためには、単に個々人が地道に努力するだけでは足りないようにも思える。今我々に必要なものがあるとしたら、それは何なのだろうか。

参考文献

石井米雄 1975 『上座部仏教の政治社会学 一国教の構造一』 創文社。

中村元 1959 『宗教と社会倫理 一古代社会の倫理思想一』 岩波書店。

S・J・Tambiah, 1976 *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background*. Cambridge University Press.